

4. なんで下まで行くと壊れるのかな? ~5歳児と同じ場で遊ぶ3歳児~ なかの保育園(島根県出雲市) [3歳児]

5月頃、3歳児は、竹の樋と水を使っての川作りや、4、5歳児がしている泥だんご作りを見様見まねで楽しんでいた。だんご作りをしていた5歳児が‘樋’にだんごを転がしたことで、3歳児も水を流す遊びから、だんごを転がす遊びへと変わっていった。遊びが展開することで、子どもたちの気付きや発見が出てきた。

子どもの姿	保育者の気づきと支援
<p>だんごが転がった!</p> <p>作っただんごを竹の樋に転がす遊びが始まった。子どもたちは、自分の作っただんごを‘樋’に転がす。「わぁ〜転がるよ〜」と嬉しそうに言う子どもたち。だんごが転がるということが子どもたちにとって、とても楽しかったようだった。</p> <p>何度も何度も転がしていると、転がしただんごは途中で崩れたり、最後まで転がっても、下に落ちると壊れてしまったりする。</p> <p>B児「あ〜壊れた。もう一回やってみよう!」 転がしてみるB児。</p> <p>B児「また壊れた〜!」</p> <p>C児「途中で壊れるね〜」と、何度も何度も転がしているうちに、C児はいつも同じところで壊れることに気付いて言った。</p> <p>C児「あ!これ(節)がないのでやればいいんじゃない?あそこに置いてあるの(プラスチックの樋)を使ったらいいかもしれん!」 さっそくプラスチックの樋を持ってきたC児はだんごを転がしてみた。だんごを転がしてみると、節でひっかかることはなくなったが、下の方で壊れてしまう。</p> <p>B児「なんで下まで行くと壊れるのかな?だんごが柔らかいから壊れるかもしれん…そうだ!もっと固いだんごを作ればいいんだ!Aちゃんが上手だから作り方聞いてみようかな」 A児は4、5歳児に教えてもらいながら毎日のようにだんご作りをしているので、だんご作りのことに詳しくあった。</p> <p>B児は、A児に固いだんごの作り方を教えてもらいに行った。</p> <p>B児「ねえ、Aちゃん。固いだんごってどうやったら作れる?」</p> <p>A児「固いだんごはね、トンネルの下(築山の所)の土がいいよ。あと、最後にさらさら砂をかけたなら強いのできるよ!」</p> <p>A児は、手馴れた様子でだんごを作り、B児に作り方を教えていた。それを聞いて保育者もB児と一緒に作ってみた。A児に教わって作っただんごは少し湿り気があるが、固いだんごに仕上がった。</p> <p>そのようにして作っただんごは、転がしても壊れにくかった。「固いだんごができた〜!」とB児はとても喜んでいて、この日作っただんごを「これどうする?」と子どもたちに聞いてみると、「とっておきたい」という意見がでたので、お皿に入れてとっておくことにした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> これまで‘樋’に水を流す遊びを楽しんでいた子どもたちは、だんごを転がすという新しい遊び方に興味津々であった。‘樋’を転がり落ちるだんごを見て、「ぼくのだんごが転がった」と、とても嬉しそうだった。転がるということが子どもたちにとっては新しい発見だった。 壊れても何度も繰り返し転がす姿がある。繰り返し試す中でどうして壊れるのか、子どもたちの方から見つけることができた。 子どもたちは、「節」と「だんごが柔らかい」という2つの原因を見つけた。その解決として硬いだんごを作ることを思いついた。 原因と解決方法を見つけたことは、日ごろの遊びの積み重ねがあったからではないかと思い、環境作りの大切さを感じる。 A児がだんご作りをしているところを子どもたちはしっかりと見ていたようだ。子ども同士のかかわりが見られる場面であった。 A児に教えてもらって作っただんごは、これまでB児が作っていた土に水を混ぜて作った泥だんごとは違い、少し湿り気のある粘土質のだんごであり、B児にとって新たな発見であった。 子どもたちは、自分たちでひとつひとつ試すことで納得し、次の意欲へと広げていった。子どもたちの気付きに対して、保育者は見通しを持ってかかわらなければならないと思った。

考察

「固いだんごは下まで転がっても壊れない」ということは、5歳児と一緒に遊び、見たり、まねたりしてだんごを作り遊んだことで発見できた。

竹の樋にだんごを繰り返し転がすことで、壊れることやうまく転がらないことに気付き、「節がない樋を使うとひっかからずに転がる」ということは友達同士のかかわりの中から発見することができた。このような姿から、保育者は子ども同士の日常的な何気ないやりとりや、異年齢児とのかかわりの大切さを感じた。

壊れないだんごができた!!

次の日、お皿に入れて置いただんごが気になったB児が保育者に話しかけてきた。

B児「先生あのおだんごどうなったかな？」

保「一緒に見てみようか」

B児「うん！見てみる！」

お皿に置いておいただんごに触れてみるととても固くなっていた。

B児「わぁ～このだんご、すごく硬くなってる」

保「ほんと、カチカチだね！」

B児「これ、なんか石みたいだねえ！すごいね！」

一日たっただんごは乾燥して昨日のだんごと全く違うものになっていた。B児は、だんごを手を持ち、その固さに驚いていた。

さっそく、築山の上から直接だんごを転がしてみる。

B児「わぁ～すごい。転がった～。速いね！」

B児はいくら転がしても壊れないおだんごが嬉しかったようで何度も転がしていた。また、このだんごは築山の上から転がすとスピードを上げて転がり落ちる。

それを見ていた他の子どもたちも集まってきて「Bくんのおだんごすごいねえ～」と言い、「僕も取っといただんご持ってくる！」とそれぞれ昨日置いておいただんごを取りに行った。そしてみんなで転がして遊んでいた。

十分に遊んだ子どもたちは、明日もこの続きをするために、カチカチになっただんごを「ポケットに入れとく」「ずっと持っとく」と言って大切にとっておいた。

・ B児が楽しみにしている気持ちに共感し、取っておいただんごと一緒に見に行くことにした。



柔らかい
だんごと
硬いだんご

・ だんごを一日置いておいたことで、乾燥して偶然にも固いだんごができ上がり、子どもたちはもちろんのこと、保育者自身もとても驚いた。子どもたちが望んでいた「転がしても壊れないだんご」が偶然にもできあがったことは、B児にとって大きな発見だった。

・ B児はいくら転がしても、どの高さから転がしても壊れないだんごができたことがとても嬉しかったようで何度も転がした。

・ こうした発見は全てが楽しく、不思議で、子どもたちの心がゆさぶられるものであった。

だんごを樋で転がしてみよう

B児は、カチカチのだんごを何度も築山の上から転がして遊んでいたが、そのうちにただ転がすだけでは物足りなくなったのか、「樋」を取りに行き、築山に持ってきた。

B児「あ！ここに置いたらいいかもしれないよ」と言って、B児は築山のトンネルに樋を引っ掛けて角度をつけ、だんごを転がしてみた。

B児「見て見て！転がったよ！」

だんごは勢いよく転がり落ちる。

さらにB児は築山の上まで「樋」を持っていき転がしてみる。築山の上から転がしただんごは勢いをつけて園庭の真ん中あたりまで転がり落ちていった。



・ B児の「もっとやってみたい」「こんなこともしたい」という思いは、3歳児の興味関心そのものであり、科学する心の出発点であると思う。



考察

この遊びを繰り返すことで、「泥だんごが翌日固くなる」ことや「固いだんごは勢いよく転がり、下までいっても壊れない」といった新たな発見や驚き、気づきに出会うことができた。それは周りにいる友達や異年齢児とのかかわりの中にもヒントとなる素材や環境があったからではないかと思う。

また、「もう一度やってみたい」「こんなふうにやってみよう」など子どもたちの挑戦する気持ちにつながり、その中で気付いた問題を解決し、さらに意欲をもって遊ぶことができた。

ポイント

「泥だんごを転がす」遊びをしている5歳児が、3歳児の貴重な人的環境になっていることが分かります。単に5歳児の姿をまねてもできず、5歳児に貴重な情報を教わっても簡単には「固くて最後まで壊れずに転がる泥だんご」はできません。自分で作り、観たり教わったりすることで自分のしていることとの違いや、扱う土や樋そのものの違いなどを、感じ・気づき・繰り返し試して、思いの実現に近づいていきます。子ども同士で操作できる用具や環境、困難を乗り越えるための支えになる保育者の援助などにより、子ども同士による遊びの伝達や目的の達成という充実感・満足感とともに、多くの学びによる自身の成長を実感しています。